

取材旅行



井伏鱒二

新潮社版



Printed in Japan ©

取材旅行

昭和三十六年九月十日發行
昭和四十五年七月十五日二刷

定價八〇〇圓

著者 井伏鱒二

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京京新宿區矢來町七一電話
東京 〇二二一 振替東京八八
郵便番號 一六二

印刷所 大日本印刷株式會社
製本所 新宿 加藤製本所

（落丁本はお取替えいたします）

取材旅行 目次

土佐の土居城

七

消えたオチヨロ船

六

洪水銀座の村

五

よごのうみ

四

大坂城

三

葛原勾當

二

吉備の旅

二五

千屋の牛市

二六

九谷焼

二七

熊野路

二八

知多半島

二九

能登半島

三〇

取材旅行

土佐の土居城

土佐には「いごツそう」といふ言葉がある。これは古語辭典にも俗語辭典にも見あたらない。(今度、私は取材旅行で土佐へ行つて高知新聞の青山さんに會つたので)その意味を聞いてみた。

いごツそうとは、土佐人にありがちな性格の形容語ださうである。頑固で理窟つぱく、氣むづかしい人。あくまでも片意地で、人の云ふことを採用しない人。執拗で、やにつこい人。わからず屋で融通のきかない人。一見、あけすけのやうに見えながら、用心ぶかい一徹屋。獨り合點で、うん知つた鳩の巢。義理名分を強調する觀念屋。

「では、いいところが無いことになりますね。」

私のこの問ひに對して、青山さんはかう云つた。

「しかし、いい意味から云へば、土佐人には叛骨精神が一本、ぐつと太く通つてゐます。これが、いごツそうの本領です。幕末の土佐の志士、武市半平太、坂本龍馬なども、いい意味でのいごツそうです。酒は飲むが土性骨がすわつてゐるのですね。いごツそうは、土佐の南學とも

關聯するところがあるやうです。」

青山さんは、いごツそうの話はそれだけにして、土佐に來たら酒が飲めるやうな口をきいてはいけないと注意してくれた。「少々なら飲みます。」と云ふ返答は、升々だから、土佐では二升は飲めるといふ挨拶語になつてゐるさうだ。幕末のころ、土佐の藩主山内容堂が土佐の船頭たちに「一升以上の酒を飲む者は、浦戸灣口の余の別荘に參れ。酒を振舞つてつかはす。」と布令を出した。ところが船頭は一人も來なかつた。その内情を調べると、一升以上とは何ごとか、三升四升以上ならまだ話がわかる、と船頭たち、大むくれにむくれて臍を曲げたためだとわかつた。船頭たちとすれば、いくら上意とは云へ日ごろから自負してゐた酒の手前がある。いごツそうを發揮したわけだ。

「どういふものか土佐人は、昔も大酒を飲んでゐたやうです。」と青山さんが云つた。「紀貫之の土佐日記にも、都へ歸る貫之をしたつて土地の者が後をついて來る。それはいいが、貫之が港で風待ちをしてゐると、別れを惜しむ土地者が來て大酒を飲む。子供までが酔つぱらつて、千鳥足に歩く。さういふことを書いてゐます。貫之朝臣も呆れてゐたのではないでせうか。」

以前、土佐出身の田中桃葉先生の酒には私も驚いた。田中さんは自分が大いに飲むばかりでなく、人にも無理やり飲ましてゐた。こちらがそれを辭退してゐると、酒を飲まないやつは俗物だと云ひがかりをつけるので、こちらも意を決して飲むことになる。田岡典夫編輯の隨筆雜誌「博浪沙」には、「玉唾追憶」と題して生前の田中さんの醉語を次のやうに記してある。

「男子の胸には磊塊ちひくわいというてからに、女子供には判らん塊くわいりが出来て來よるもんぢや。酒は男兒のこの磊塊ちひくわいにそそぐものぢや。——さ、××君、お前まへん、大いに呑まんどいかんぜよ。」

ついでに記せば、いごツその土佐人の一面が偲おもばれる田中さんの言葉が書き加へてある。

「(バットが値上げとなりし時に)役人共が煙草を上げよるきに、今日から、あしはチェリーを吸うてやる。」

當時、チェリーの方がバットより高かつた。

私が今度土佐へ行つたのは、高知から約十里東南にある安藝市といふ海岸町を訪ねるためであつた。安藝市の町はづれには、舊藩時代の武家屋敷の一郭が残つてゐる。その武家屋敷を脇に控へ、戰國時代の土居城といふ山城を取入れた舊藩時代の半山城の一部が残つてゐる。この一帯を今では「土居廓くわく中」と云つてゐる。城主は山内家の家老五藤氏で、世襲であつたため、今でも五藤といふ人が城内に住んでゐる。この土居城や土居廓中の状況一般を見るのが今度の旅行の目的であつた。

私は戰前から戰爭中にかけて土佐には四度か五度か出かけてゐる。安藝の町にも二度行つたが、武家屋敷が残つてゐることは知らなかつた。青山さんから貸りた資料によると、戰國末期の土居城主は安藝備後守國虎といふ者で、その先祖は王申じんとんの亂に連坐して土佐へ流された左大臣蘇我赤兄である。赤兄は有馬皇子に叛亂をすすめておきながら、皇子を叛亂の罪人として搦め捕り、中大兄皇子の前に突きだした人物である。赤足が土佐に流されたのは、蘇我氏が没落

の一途を辿るのであせりを見せた結果だと云はれるが、土佐へ流されてもその子孫は室町時代から強力な豪族になつて、戦國期には「安藝五百貫」と云はれる身分にのしあがつてゐた。一貫を十石と概算すれば五千石の所領である。これが國虎の代になつて、歸化人の末である西隣の豪族長曾我部元親と勢力を争ふやうになつた。

元親は安藝方の慾心ふかい家來を利で誘ひ、いざと云へば内應するやうに手筈をきめ、その上で口實を設けて安藝へ攻め寄せた。「精兵七千二百騎をひきつれ」と資料に云つてある。これに對して安藝方は、東隣の浮津室津の加勢も入れて五千三百餘騎の劣勢である。

合戦は七月十日（永祿十二年）に始まつて、八月十一日に安藝方の惨敗に終つてゐる。敗軍の將國虎は自害する代償として、生き残りの家臣の命を助けることを條件に元親のところへ使者を送り、その許諾があつたので、十三歳になる倅を隣國阿波に落ちのびさせ、自分は菩提寺に入つて老臣有澤某の介錯で腹を切つた。有澤某は國虎のあとを追つて自害した。安藝方に加勢した浮津室津の兵は在所に逃げ歸つた。

抄述すれば以上のやうな戦記だが、私は旅館の一室でそれを讀みながら、安藝國虎といふ大將も土佐人らしくいごとさうだと思つた。合戦の始まる三箇月前、元親は國虎に向けて、「今後とも親交をつづけたい。お互に助けあつて行きたい。自分はそれを熊野權現の神に誓つて云ふ。近いうちに御來駕を願ひたい。」と申し送つてゐる。これに對して國虎は、「この國虎の祖先は左大臣である。歸化人の末なる元親ごとき者とは家柄が違ふ。元親の方より出向いてこそ

順當である。この國虎に出向いて來いとは、元親は血迷つたか。」と使者を呶鳴りつけてゐる。

おそらく、その場にゐた國虎の重臣たちは、後刻、額を集めて協議したことだらう。今や元親は日の出の勢ひである。土佐で一番の穀倉と云はれる香長平野を領有し、妻女の縁をたどつて明智光秀を介して織田信長に款を通じたとの噂がある。また最近は、浦戸に着く船で鐵砲や彈藥を大量に仕入れたといふ確報がある。彼我の實力は重臣たちにはよくわかつてゐる。

資料によると、重臣の一人である黒岩越前といふ律義者が、次のやうに遠まはしに國虎を諫めてゐる。

「凡そ萬物は春に生じ、夏は茂り、秋に收め、冬に藏するは自然の理でござる。今、元親は春夏のごとく生々として伸びあがり、御當家は數十代九百年の長きにわたつて榮え、物滿ち事足り、秋冬にひとしいところであると思召せ。それ、盈つるは缺くると申します。ここは暫くお忍びのほどを乞ひ願ひ、一旦は元親の無禮をお許しに相成つて、やがて元親が威に乗り驕るときこそ、我が願ふところと思召せ……。」

國虎は黒岩越前の言葉を遮つて、

「たとひ屍を道のべにさらすとも、元親ごときの下風に立つこと、思ひも寄らぬ。」

と強く云ひ放つた。黒岩越前は返す言葉もなかつたと書いてある。

國虎の夫人は、土佐幡多郡宿毛すくもの、一條といふ公卿大名のところから來てゐたものである。

(やがてこの大名も元親に亡ぼされるが) 土居城が陥ちるとき夫人は駕籠で一條家に送られて

行つた。城内の婦女たちのうち、命が助かつたのはこの夫人ただ一人だけであつた。あとの婦女たちは老若を問はず、みんな城の裏手の濠に身を投じて自決した。

この濠は當時「すりばち」と稱してゐたが、後世これを女郎ヶ淵と云ふやうになつた。安藝町出身の山本又六氏の話では、幼少のころにはこの淵が干あがると魚を捕りに出かけたもので、銀の簪など網にかけたものがあつたといふ。現に山本さんも火繩銃の銃身を拾つたことがあるさうだ。

（山本さんは土居城のすぐ下の屋敷に生れ、幼年時代ここで育つた人で、今年八十歳である。私が土佐から歸つた後で、土居城に關する覺書と土居城の規矩整然たる見取圖を書いて下さつた。）

私は青山さんとの約束にしたがつて、翌日の朝、同行の丸山泰司君と一緒に青山さんを社に訪ねた。すると青山さんの先輩でもあり、田中桃葉先生と若いときから友達であつた中島さんといふ幹部社員に逢つた。私はこの中島さんには、以前にも土佐に行くたんび世話になつた。室戸崎に案内してもらつたり、浦戸灣の投網の廻し打ちに連れて行つてもらつたりして、龍河洞といふ鍾乳洞にも連れて行つてもらつたことがある。

中島さんは云つた。

「やあ、しばらく。よう來たなう。いつ來た。いつ歸るんか。ゆつくりできるんぢやらう。」

私は豫定を云つた。今日は、土佐の國分寺と紀貫之のゐた政廳の址を見る。明日は、安藝の

土居廓中を見るついでに龍河洞を見て、室戸で一泊。明後日は、室戸崎で釣をして、バスで阿波に抜けて歸る。

「おやおや、忙しげな旅だな。しかし、あんた土佐に来て、あんたが田中桃葉の碑に詣らんといふ法はないだらう。素通りとあつては、義理が惡うないか。」

中島さんは私と丸山君を車に乗せ、青山さんを運轉臺に乗せて桂濱へ連れて行つた。雨がしとしと降つてゐた。ここの高知の町も戦災で七分通り焼けたといふことで、私は初めての町に來たと同じく方角もわからなかつた。郊外もずるぶん模様が變つてゐた。見覚えがあつたのは、浦戸灣の入口に點々と連なる新緑で覆はれた島と桂濱だけである。對岸の種崎にあつた船頭たちの目じるしの松も消えてゐた。

桃葉先生の碑は、自然石に「田中桃葉先生碑」と簡素な書體で刻んである。村松梢風氏の筆になるもので、この碑の除幕式ときには私も數人の友人と一緒に參列した。見晴らしのいいところに立てられてゐて、岬の突端の坂本龍馬の銅像と、尾根にある大町桂月の碑の中間に立つてゐる。

「どつちの碑に先に詣らうか。今日は、しかし桂月先生の碑は後まはしにしよう。」

と中島さんは、隠し持つた酒の一升瓶を私に手渡した。

「では、お先に。」

私は田中さんの碑の前に立つて、かつて田中さんが桂月の碑にお詣りしたときのやうにして

酒を手向けた。田中さんは私たちを連れて土佐に行くたびに桂濱の桂月の碑にお詣りして、隠し持った一升瓶の酒を碑の臺石にそそぐのであつた。その前に、先づ田中さんは古びたソフト帽を脱ぎ、碑に向つて「先生、丈夫でやつちりますきに。」と、久しぶりに會つた人に云ふやうに挨拶する。それから一升瓶の酒を臺石にこぼすのだが、それも極めて惜しげに二滴か三滴かたらず。私は三度さういふ風景を見てゐるが、三度とも同じやうなやりかたであつた。脱ぐ帽子も三度とも同じ古びたソフトであつた。

私は白いピケ帽を脱ぎ、何も云はないで二滴か三滴か田中さんの碑の臺石にたらしした。同時に、私の後ろで、

「おい田中、井伏君が來てくれちよるよ。」

と中島さんが云つた。

次は丸山君、中島さん、青山さんと順々に酒を手向けた。

桂月の碑にも酒を手向けて高知の町に引返した。

私たちは中島さんと社の前で別れ、高知市の東に當る土佐の國分寺へ直行した。途中、紀貫之の舟出した大津の港のあつた場所と、長曾我部元親の居城のあつた岡豊おこの城山を青山さんが教へてくれた。この一帯は岡豊村と云ひ、なだらかな岡が幾つも並んでゐる。紀貫之の來てゐた時代には、その岡が入海のなかの島であつたとも云ひ、また川中島であつたといふ説があるさうだ。今は田圃たんぼのなかの岡であつて、田圃では四月下旬だといふのに早稲の田植ゑが始まつ